

## 第2回加古川市まち・ひと・しごと創生総合戦略会議 議事録

- 1 開催日 平成27年8月10日(月) 10:00~12:00
- 2 開催場所 新館9階 191会議室
- 3 出席者 岡田市長、  
橋本委員、徳田委員、森本委員、上田委員、田端委員、杣山委員、  
小野委員、村上氏(破魔委員代理)、榊原委員、河野委員、  
門野委員、真木委員、高橋委員
- 4 出席した職員 白水副市長、  
田井企画部長、井ノ口企画部次長、高田地域振興部担当参事、  
田渕政策企画課長、三和政策企画課担当副課長、下田政策企画課係長、  
井口政策企画課政策推進係主査

### 5 議事の要旨

#### ○ 開会

開会案内(三和政策企画課担当副課長)

#### ○ 岡田市長あいさつ

皆さん、おはようございます。第1回会議は、市民アンケートの速報と人口動態の推移をお示しし、様々なご意見をいただいた。その後、市民の皆さんからの地方創生に関するアイデアや地元企業等との意見交換を通じて、お手元の資料(加古川市人口ビジョンの骨子、加古川市まち・ひと・しごと創生総合戦略の骨子・全体像、加古川市まち・ひと・しごと創生総合戦略のリーディングプロジェクトほか)を作成してきた。

市としてもこの機会を捉えて、市民の皆さんをはじめ委員の皆さんからさまざまなアイデアをいただきながら、市として取り組んでいくべき事業をしっかりと絞り込みたい。

本日も、皆さんからの忌憚のないご意見をいただきたい。

#### ○ 前回議事録の確認

事務局から確認(特に意見等なく、議事録を確定。今後ホームページで公表する。)

#### ○ 資料説明と意見交換

##### (1) 資料1(加古川市人口ビジョンの骨子)

事務局より「資料1」について説明

岡田市長： このあと順次資料説明が続く。資料説明の内容で不明な点や質問があればその都度ご意見をいただきたい。

真木委員： 転入・転出の均衡を図るという考え方になるのか。よく分からないのは、例えば会社で異動により東京へ行く人と東京から来る人があるがそれは相殺とみなし、若い人が出て行くのを抑えるという意味か。

事務局： 転入・転出の均衡というのは、例えば転出者が100人いれば、転入者を100人増やすことで相殺して0（ゼロ）人にするということを考えている。本市の社会動態を見ると、ここ6年間の平均で年間約200人の社会減。すなわち転出が200人ほど多い状況にある。これを均衡させるには、200人を足止めするのか、200人呼び込むのか、さまざまな方法があると思うが、いずれにせよ社会増減を0（ゼロ）人にすることをイメージしている。

門野委員： 人口の増減に関しては、加古川でも農村部と都市部では格差があると思うが、そのあたりは将来どのようになっていくと想定しているのか。

事務局： ご指摘のとおり、都市部とそれ以外では、人口動態はずいぶん違う。今回の人口ビジョンは地域ごとに細かく積み上げたものではなく、市全体でどうしたらいいかという方向性を示すに留まっている。例えば、北部では転出が著しいので市内から人を呼び込むなど、施策を立案していくなかで細かく見ていくことを考えている。

岡田市長： 私も町ごとの人口推移をエクセルで描いてみたことがあるが、北部や西部は人口が減少し、南部は維持若しくは人口が増加している町もあったように思う。ご指摘の点は、北部や西部をどうするのか、という点にも関係してくると思われるので、ご指摘の点を念頭に置いて施策を考えていくことにしたい。

岡田市長： 資料2、3、4について一括して説明を。

## (2) 資料2（加古川市まち・ひと・しごと創生総合戦略の骨子・全体像）

事務局より「資料2」について説明

資料3（加古川市まち・ひと・しごと創生総合戦略のリーディング・プロジェクト）

事務局より「資料3」について説明

資料4（加古川市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定にかかるアンケート調査結果）

事務局より「資料4」について説明

岡田市長： この時点でご不明な点やご質問はないか。

村上氏（破産委員代理）： 地方創生のポイントは人口減少をどう食い止めるかということ。その中に自

然増減と社会増減があるが、資料2の「基本目標1 結婚・出産・子育ての希望をかなえる」については、結婚が一番大事だと思う。いかにして結婚できる機会を設けるか、結婚したいという気持ちになってもらうか。「出会い・結婚支援」に「婚活イベントの開催支援」とあるが、他市町も大なり小なりやっている。

何か具体的にこんなことをしたいという思いはあるのか。

事務局： 総合戦略の骨子・全体像をまとめるにあたり、若手職員を中心とした部会を立ち上げ、積極的に議論をしてきた。そのなかでは非常にユニークなアイデアが出てきている。例えば、「JR 加古川線の車両を借りて、電車内婚活イベントをする」など。アイデアはたくさんあるが、行政としてどう関わるのかという点が議論となった。

真木委員： 「延長保育や一時預かり、病児・病後児保育」はまだまだ進んでいないと思うが、このあたりには力を入れていくのか。加古川は工場が多く、3交代制の職場も多いため、休日保育や延長保育は必要とされていると考える。今後、女性にも働いてもらわなければいけない時代となり、「病児・病後児保育」も重要になってくると思う。

事務局： ご指摘の内容は非常に重要だと考えている。加古川市の待機児童数は252人、平成26年度に定員を149人増やしたにもかかわらず、県下ワースト1になっている。「延長保育や一時預かり」についても取り組むが、「待機児童の解消」が最優先課題であると認識している。

岡田市長： 「病児・病後児保育」についても、市としても取り組みを進めているところであり、総合戦略にも書き込んでいきたいと考えている。

真木委員： 待機児童の解消については、どうしても後追いになってしまう。待機児童が100人いるところに、定員を200人増やしても、おそらく足りない状態が生じる。神戸市では待機児童を減らすために小規模保育の増設を進めた。小規模保育は評価が分かれるところであるが、そういった手法もある。

また、「病児・病後児保育」は、周辺地域との関係で、作りたくても作れないという課題があると聞く、市としても力を入れていかないと進まない。休日保育をやっているのは尼崎市ぐらいで、他市町はあまり実施できていない。

加古川は3交代制で24時間働く人が多い地域なので、ニーズはある。今は、民間保育、認可外保育で受け入れているのではないかと推測する。

橋本委員： 婚活については、自然な感じで参加できて、自然な感じで出会えるような機会を作ることができればいいと考える。

岡田市長： 県民局での取組状況はどうか。

真木委員： 県では、お見合いができるマッチングシステムを作っている。明石の保健所の1階にあるのだが、加古川からは少し行きにくいのかも。マッチング件数は増えている。茨城県でも同様の事業を実施しているが、日立製作所のお膝元で男性社員の参加が多いため、マッチング率が高い。加古川も製造業の方が多く、製造業に携わる男性社員に加入してもらえるとかなり変わってくるのではないかと。例えば、明石の分室を加古川にも作っていただいて、そうした方に多く入会していただくのが良いのではないかと、思う。

岡田市長： うまく連携できる仕組みを考えるなど、マッチングシステムを利用する敷居を下げる工夫を考えていきたい。

田端委員： 資料4後半の説明がなかったのは何か理由があるのか。また、アンケートがどのように生かされたのか。例えば、「(6)子どもは何人か」では、理想の子どもの数に3人と答える方が444人いて、非常に大きな数値と考える。合計特殊出生率2.07を実現しようとする、この部分を考慮にいと説明ができない。

また、「(9)加古川市に愛着を感じるか」について年代別に見ると、30代から50代までの方は「やや感じる」が最も多く、他の年代の方よりも市にあまり愛着を感じていないことがわかる。おそらく大人になってから転入してきたことが理由として考えられるが、第2世代はそれなりに感じているわけで、そのあたりをどう考えるのか。

事務局： 「(6)子どもの数」について、理想の子どもの数は3人と考える方が444人、2人と考える方が542人、理想では人口置換水準の合計特殊出生率まで到達しそうな勢いだが、実際の子どもの数は0人若しくは1人という方が多い。

希望出生数という言葉もあるが、社会環境さえ整えば、本市でも合計特殊出生率2.07を確保することは将来的に不可能な数字ではないと考えており、国に準じて努力していきたい。

柚山委員： 女性が働く際、子どもを誰が育てるかということは価値観に左右されるものであることを前提に、資料と合わせ日頃考えていることを述べたい。資料3の左上「子育て中の女性の多様な働き方を支援」の中に、「子育てを終え復職を望む」とあり、次には「子育てママなどフルタイム就労が難しい」とある。

一方、資料2の基本目標1に「ワークライフバランスの促進」「ワークライフバランス大賞」とある。女性が働くことについて、資料3ではM型就労を前提に戦略を考えているが、M型就労のうち2度目の就労の場合はパートタイムであることが多く、低賃金であることが多い。アンケートの9ページ、「(8)子どもがのびのびと育つためにはどのようなことが必要か」について、「保育を充実

するなど子育てと仕事の両立」を選んだ人が2番目に多い。ワークライフバランスを求めているのは、男性よりも女性が多く、年代別にみると50代以上で多くなっている。この年代の方々はパートタイムでやってきて、低賃金を実感しているからだろう。別の調査でも、50代の方が「続けて働きたかった」と話しているのをよく聞く。この総合戦略のなかでワークライフバランスについて明記していくのであれば、最初から「子育てを終え復職を望む」とか「子育てママなどフルタイム就労が難しい」と書いてしまうと矛盾が生じないか。地元企業にも協力してもらわなければいけないが、市としてどういう覚悟を持って女性の就労を考えていくのかを問いたい。例えば、トヨタ自動車のように家族手当を見直し、子ども手当を手厚くするという事例も出てきている。産官学民が連携して、いかにいい方向が示せるか。アンケートからもワークライフバランスを真剣に考えることが大事だと考える。

事務局：市としては中長期的な視点と短期的な視点で総合戦略を考えている。ワークライフバランスの実現については、企業の意識を変えていく必要があり、中長期的な視点で取り組んでいく施策であると考えている。

一方で、子育てを終え復職を望む方や子育て中の方の就労支援については、短期的な視点で取り組んでいく施策と考えている。ご指摘のとおり、ワークライフバランス大賞など、地元企業への啓発活動を通じて意識を変えていくことは非常に重要であると考えている。

岡田市長：第1回戦略会議でも、女性が働きやすい会社の話があったように思う。いただいた意見も踏まえ、行政としてどこまでするのかということも含め、表現については調整させていただく。

小野委員：資料2の「基本目標2 暮らしの安全・安心を守るとともに、地域と地域を連携する」について、総合戦略でわざわざ扱うべきものなのかと考える。「暮らしの安全・安心を守る」というのは、行政として日頃から取り組むべきことだと考えるが、わざわざ盛り込む理由は、他市町に比べて劣っていると考えているからか。

事務局：「暮らしの安全・安心を守るとともに、地域と地域を連携する」を目標として設定した理由は、国が示す目標を参考にしたところがある。「暮らしの安全・安心を守る」というのは、地方創生にかかわらず、いずれの市町も取り組んでいることであるが、市としても重要な課題であると考え、あえてテーマに取り入れた。これまで不十分だったからではなく、依然として重要であるから積極的に取り組んでいこうとするものである。アンケートでも、4つの目標のうち目標2は13.2%と4番目の関心度となっている。この取り組みが全くできていないわけではないと考えている。

岡田市長： 目標を設定する際、「結婚・出産・子育て」を最初に持ってきたという経緯もある。国の重点検討項目の区切り方を見ながら、どの項目に入れるべきか悩みながら、やるべきことを埋め込んでいるところである。

橋本委員： 資料2の基本目標1の「(2)の②子育て環境の魅力アップ」はとても良いことだと思う。

「ママとベビーのコンサート」とあるが、ママと子どものイベントは結構充実しているので、むしろ、パパやおじいちゃん、おばあちゃんを含めた家族みんなで参加できる子育てイベントを土日などにやって欲しい。

日岡山公園周辺の整備について、象徴的な場所として一箇所整備するのは分かるが、その他の既存の公園等も充実して欲しい。日岡山は傾斜も多く、小さい子どもを連れて遊ばせる場としては少し不安なところがある。また、樹木が多いので見通しも悪く、不審者対策も必要となる。

総合文化センターの芝生広場に木陰や遊具がもう少し欲しいし、駐車場も1時間より長くして欲しい。

岡田市長： 先日、男女共同参画センターが「パパとママの未来カフェ」を開催していた。ご夫婦で10組ぐらいが参加されていたが、「パパも参加できて良かった」という声もあった。ご意見を踏まえ検討したい。

日岡山公園の再整備が特出しになっている点について、子育て世代が家族で半日若しくは一日過ごすことのできる公園が市内にはありそうでない。小野市のひまわりの丘公園や加東市の播磨中央公園などに行かれている方も多いのではないかと考えた。木が茂って薄暗いところを改善したり、芝生広場を整備したり、いろいろ考えていく必要がある。

また、総合文化センターの芝生についてもご意見をいただいたが、今後の検討課題としていきたい。

門野委員： 資料3の左上「地場産業、6次産業化（農商工連携）による地域の活性化」とあるが、加古川は生産者と消費者が近いので、地産地消など大きな可能性のある分野だと考える。「加古川ブランドの創出」や「地場産市場」とは、今の段階でどのようなものをイメージしているのか。

また、駅周辺の整備については、数年で取り組む総合戦略に適するかどうかという面もあるが、にぎわい創出や空き家・空き店舗対策など、さまざまな課題がある。アンケートを見ても、若い世代で駅周辺の機能充実を求める声が強いので、市として駅周辺の整備についてはしっかりと考えて欲しい。

事務局： 「加古川ブランドの創出」や「地場産市場」について、現時点で具体的な検討はまだ行っていない。地産地消については、食肉をはじめ地場野菜などを安定供給できるのかといった課題や地元農家さんとの協議、所管部署など庁内調

整も必要となり、簡単に答えはでない。

駅周辺の再整備については、姫路市をはじめ明石市でも積極的に進められている。本市において地方創生として取り組もうと考えているのは、空き店舗対策や賑わいの創出などソフト事業が中心となるが、新病院の建設などハード事業も意識しながら手を打っていくことを考えている。

岡田市長： 補足すると、農業に従事されている方々と農業振興について話をしていると、ブランディングについては行政が応援できるのではと感じている。本年6月から取り組んでいるふるさと納税の取り組みでは、返礼品として牛肉やお米を選ぶ方が多く、地域ブランドとしてPRするためのいいプラットフォームができたのでは、と考えている。

今後、中学校の給食にも本格的に取り組んでいくが、全校生徒分となる9,000食分の地元野菜を供給し続けることは難しいが、地元食材を使う機会も作っていいのではないかと考えている。また、個人で地元食材を使ってブランド化に取り組んでいる方もいる。婚活イベント等で地元食材を出すなどできるかもしれない。

また、駅周辺の整備は、市としても一大課題だと考えている。資料2に具体的に書いている事業は、ある程度可能性が見えてきているものである。先が見えない事業については、なかなか書くことができない。駅周辺の整備については、商工会議所をはじめ、さまざまな立場の方に相談をしながら、長期的な視点で議論を重ねていかなければいけないと考えている。

榊原委員： 資料2の基本目標2の「(4)地域連携により元気・魅力を高める」については、非常に重要な分野だと考えている。連携による相乗効果もある。この分野に新たに取り組みを検討する事業がないことが気になる。既に取り組んでいる事業でほぼ網羅されているということか。

事務局： これは連携中枢都市圏事業を推進しようとするものである。本年4月に姫路市と連携協約を締結し、播磨圏域7市8町で協約を締結している。大きなカテゴリーでは、企業誘致の推進や広域観光といった表現になってしまうが、中身については毎年新しい事業を検討し、既存事業もブラッシュアップしていくこととしている。姫路市をはじめ、他市町と連携しつつ、効果的な事業を継続的に考えていきたい。

真木委員： 基本目標4の「企業誘致」について、このあたりの工場群は、(老朽化による建て替えを理由に)北播磨へ出て行っている。そうした状況を踏まえると、いかに魅力的な工業団地を作っていくかも大きなテーマになってくるのではないか。

高校卒業後、工場に就職した人は、職場の近くに住んで通勤していると聞く。加古川の北部に住み、南部の工場に行く方が多いように見える。そのため、い

かに工業を発達させるのか、いかに工業系の学校に頑張ってもらえるのか、住み続けてもらうための大きなテーマになるのではないかと。

次に、「国包建具の地域ブランド化」について、実際には担い手となる職人が危機的状況にある。工務店等に雇われて働いている人がなんとか続けている状況である。高齢化も進み、若手をどう育成していくのかが課題である。例えば、古民家再生ファンドに国包建具を組み込むなど、建具職人が働いていくことができる場所を考えて欲しい。

また、6次産業化（農商工連携）について、農は農、工は工という現状を変えることができていない。農と工をつなぐことが県庁を含め行政の役割だと考えている。

駅前について、姫路や明石と比べても加古川駅前は寂しい気がする。地方創生では、東京からいろんな会社を呼んでくることを盛んに言っているが、その受け皿がどこにあるのか。「オフィスビルを作るのでここに来てください」と言えば可能かもしれないが、「税金優遇するから来てください」では難しい。

岡田市長： いろいろご意見をいただいた。工業系の学校から地元企業へ就職するといったことは重要だと考える。市役所もインターンの受け入れを始めている。既に取り組んでいる地元企業もあるが、市が率先して取り組むことで、市内工場をはじめ地元企業にも広げていきたいと考えている。

また、国包建具の実情はご指摘のとおり。最近、建具組合の方々も何とかしようと積極的に活動されており、市職員も繰り返し接触している。まだ不確定ではあるが、駅なかに装飾物として使えないかなど、売り上げにつながることを支援し、若い職人が入ってくるようにしていきたい。

駅周辺もいろいろ課題がある。JRをはじめ様々な立場の方と話をしていかなければいけない。

河野委員： 基本目標2の「(1)の②防災・減災対策」について、住む地域を選ぶ際、やはり災害に強く安全な地域を選ぶ。加古川市は「災害の少ないまち」として知られ、過去には2回ほど遷都の対象地にもなったと聞く。平清盛の時代と関東大震災の時らしい。「加古川＝安全」というイメージを作っていけば、住む場所として選んでもらえるのではないかと。

事務局： 「災害が少ないまち」というイメージは前面には出していないが、「30代、40代をはじめとした子育て世代に選んでもらえるまち」として打ち出していきたいと考えている。台風で加古川が氾濫した時代もあったが、概して災害は少ないと思うので、表現やPRの方法についていろいろ考えていきたい。

村上氏（破産委員代理）： 基本目標4の「(1)の①の都市圏での地元企業合同就職説明会の開催」について、これは市単独事業か、それとも県や連携中枢都市圏のなかで取り組む事業か。加古川はアクセスも良く、加古川に住んで市外に通勤することも十分可



能だと考える。近隣市と連携してPRするのも良いが、市単独でPRすることもできるのでは。

事務局： 加古川は、県内では比較的大きな都市ではあるが、首都圏では名前も知られていない。首都圏や都市部へのPRについては、県や播磨圏域と連携しつつ、効果的なPRを実施したい。

### (3) 資料5（地方創生に関するアイデア一覧）

事務局より「資料5」について説明

岡田市長： 全体を通して意見はないか。

徳田委員： 基本目標1について、もう少し子育て世代の方の意見を聞きたいと思い、駅南子育てプラザと東加古川子育てプラザで父親や母親を対象にアンケートを実施した。「大きな公園が欲しいとか」「地域の公園を充実させて欲しい」といった意見が多かった。また、「市外の方から自身が住まれるまち（神戸、明石など）に還元する方法はないか」といった意見もあった。「市職員が優しくて、子連れだったが助かった」といった意見もあり、そういう面でも子育てしやすいまちとしてアピールしていけると思う。

子育て期の多様な働き方について、子育てしながら働きたいという方もいれば、ある程度子どもの手が離れるまでは子育てに専念したいという方もいる。いずれの方も社会と何らかの関わりを持ちたいと思っているので、ボランティアや勉強会等に参加しやすい環境を作っていけないだろうか。

基本目標4の「地場産業」について、靴下は奈良県、東京都に次ぎ、3位が加古川らしい。ただ、紡績から靴下やタオルなど最終製品まで一貫して作れるのは加古川だけと聞く。そうした靴下の産地としての強みは、もっとほかにもあるのではないかと考える。

岡田市長： 子育てに関してはそのとおりだと思う。

靴下については、靴下工業組合の方も頑張っておられて、綿から全て市内で作った「加古川コットン靴下」を作っていたりする。ふるさと納税を含め、買い手を増やす取り組みを支援していきたいと考えている。

橋本委員： 基本目標4に「(1)若者の就労支援」とあるが、中高年の方の就労支援は考えなくて良いのか。また、若年者の方の再チャレンジ支援や中高年への再就職の支援があればいい。

基本目標3の「(1)空き家・空き店舗の活用」について、アンケートでは空き家や空き店舗を生かして欲しいという意見が多いが、改修して残すほど価値のある空き家がどれだけあるのか。取り壊して地域の公園として利用することも考えるべきではないか。加古川は渋滞がひどいので、空き家や空き店舗がな

くなり、道が広がれば喜ぶ人も多いのではないか。地域の魅力として生かす空き家もあっていいと思うが、道や公園、遊歩道として活用してもいいと思う。

岡田市長： アンケートの選択肢の決め方について説明を。

事務局： 現在、後期総合基本計画の策定を進めており、昨年度はその基礎調査を行った。そうした調査項目をベースに、若い世代の意見や要望を聞くことを主眼に選択肢を検討した。網羅できていない部分もあるが、アンケートの自由記入欄の分析を進めるなかで総合戦略に盛り込んでいきたいと考えている。

岡田市長： 確かに高齢者の就労支援がアンケートになかったが、移住促進という選択肢はある。合計特殊出生率を上げるための総合戦略を考えていきたいという思いもあるので、ご理解いただければと考えている。

田端委員： 資料5の活用について、市民の方からのアイデアを総合戦略にそのまま載せるとのことだが、それはあまり良くない。内容を精査して、例えばリーディング・プロジェクトに反映していくとか考えないといけないのではないか。

総合戦略の枠組みは国である程度決まっているが、市としてどういうストーリーを作っていくのが大事である。本日の議論を踏まえてストーリーづくりをしていただくと、市がやろうとしていることが明確になってよりよいと思う。

岡田市長： 91件の事業アイデアの取り扱いについては、ご意見を踏まえて検討させていただく。

それでは、以上をもって第2回戦略会議を閉会する。

○ 閉 会